

2020年10月25日 佐土原教会礼拝説教

聖書箇所：ヨハネ福音書 12章 44～50節

説教題：神の戒めは永遠の命

串間の幸島のサルは、イモを洗って食べることで有名ですが、50年程前、若い雌のサルがサツマイモを海水で洗って食べることを始めました。塩味がついて美味しかったのです。やがて島中のサルが真似をするようになりました。皆、塩味のついたイモを楽しみました。しかし、指導者グループの十数頭は、それを認めませんでした。「そんなのは正しいイモの食べ方ではない」と思ったのでしょうか。ところが、指導者グループの中からもイモを海水で洗うサルが現れ、彼らも塩味の効いたイモを堪能しました。それでも、ボスザル以下3頭だけは、最後まで頑として拒否したそうです。そして、ボスはついに塩味の効いたイモを味わうことなく死んでしまったそうです。チャンスはあったのです。しかし、自分からチャンスを拒否してしまいました。だから、祝福に与れなかったのです。自分が拒否することによって、結果として祝福に与れないということがあるのです。

前回は、ヨハネがイエス様の宣教活動を「イエスが彼らの目の前でこのように多くのしるしを行われたのに、彼らはイエスを信じなかった」(ヨハネ 12:37)とまとめている箇所でした。「信じる者がたくさんいた…(けれど)…パリサイ人たちをはばかって、告白はしなかった」(42)ともありました。その状況を受けてイエス様が叫んでおられる、それが今日の箇所です。イエス様は何を訴えておられるのか、それは私達にどのような意味があるのか、内容と適用に分けてお話しします。

1：内容～主イエスを通して神に繋がる

イエス様は何を叫ばれたのか。44節に「わたしを信じる者は、わたしではなく、わたしを遣わした方を信じるのです。また、わたしを見る者は、わたしを遣わした方を見るのです」(44～45)とあります。イエスを信じることは神を信じること、イエス様は神様に遣わされた方だから、イエス様を通して、人は神様に繋がる事が出来るのです。イエス様はそのことを分かって欲しいのです。ご自分を通して神に繋がって欲しいのです。どうして分かってくれないのか、分かろうとしないのか、その進むような思いが、痛みが、叫びになって出ているのではないのでしょうか。

その思いを違う言葉で叫んでおられるのが46節です。「わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれもやみの中にとどまることのないためです」(46)。イエス様と出会う前、私達は、自分の罪の姿も見えなかったし、その罪が私達を希望の源である神から遠ざけていることも分かりませんでした。私は「光」は「希望」と言い換えて良いと思います。イエス様は、その私達が神に赦され、受け入れられる道を造って下さいました。私達は、生きるために希望を必要とします。しかし自分で希望を造り出すことは出来ません。希望は神から来るものです。だから神に繋がる時、光の中(希望の中)を生きることが出来るようになるのです。森下辰衛という先生の講演の中に1人の青年が登場します。子どもの頃、大変な病気をして、それから病気の困難

を抱えて「何で僕だけが…」と思いながら生きて来られた方です。しかし、やがて三浦綾子の小説「泥流地帯」で「自分の思い通りにならない所に神の深いお考えがある」という言葉に出会って「これにも『神の深いお考え』があるのかも知れない」という希望を与えられ、前に向かって生きるようになったという話です。人は、神を信じる時、希望という光を持つのです。確かに分からないことも多い。しかし、暗闇ではなく、神に包まれて生きる道があるのです。その神から来る光(希望)は、死の向こうにも輝いている光です。教会からお出しするレターにも書いたのですが、ある牧師先生の奥様の葬儀に出て、衝撃を受けました。司式者がまず「さあ、彼女の人生をお祝いしよう」と言いました。そして始まった讃美は「まもなくかなたの」でした。英語の歌詞を直訳すると「間もなく私達は、輝く川の流れの畔に着くだろう…間もなく私達の心は、平安の歌と共に喜びに震えるだろう。そうだ。私達は天の御国を流れる川の畔で会おう。美しい、美しい…神の御座から流れる川の畔で会おう」。式場は、神への感謝と天国の希望で満ちているように感じました。これこそ光です。イエス様は、全ての人にこの光の中を生きて欲しいのです。だから「ここに光が、命があるのだ」と叫んでおられるのです。

さらに語られます。イエス様は、ただひたすら、人々を救うために、この大きな恵みを与えるために来られた方だから「わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです」(47)と言われました。しかし、その後「わたしを拒み、わたしの言うことを受け入れない者には、その人をさばくものがあります。わたしが話したことばが、終わりの日にその人をさばくのです」(48)と言われます。イエス様の言葉が、私達を救う神の言葉、真理の言葉なら、それを拒むことは、自分の救いを自ら拒むことになるのです。海で溺れかかっている人に、ヘリコプターからオレンジの浮き輪が投げられたとします。「昔から浮き輪は黒に決まっている、だから私は受け取らない」と言ったとしたらどうでしょうか。浮き輪は救いのために投げられたのに、受け取らなかったら、結局沈んで行くしかないのです。譬えはまずいですが、そういうことです。繰り返しますが、イエス様は「世を救うために」(47)来られました。しかし「ここに救いがある」というものを拒否してしまったら、その「救い」が結果として裁きになってしまうのです。だからこそそのイエス様の叫びなのです。

そしてイエス様は最後に、まとめのように言われました。「わたしは、父の命令が永遠のいのちであることを知っています」(50)。「父の命令が永遠のいのちである」、難しい言葉ですが、「リビング・バイブル」は「神の命令は人を永遠の命に導きます」(リビング・バイブル)と訳し、「メッセージ訳聖書」は「私は神の命令が生み出すものを知っている。それは本当の永遠の命です」(メッセージ訳)と訳します。いずれにしても、それは「『神の戒め』に生きることは、やがて永遠の命と言う祝福に導く」という意味かも知れませんが、それ以上に「神の戒めに生きる時、私達は永遠の命の世界に踏み込んでいる、永遠の命の世界を既に生きている」ということではないかと思います。私達は、神の戒めを信じ、守ることで、今この時から永遠の命の世界に引き込まれて行くのです。永遠の命を生き始めるのです。だからこそイエス様は、私を、私の言葉を信

じて、神様と繋がって欲しい、永遠の命を得て欲しいと、叫んでおられるのです。

2：適用～神の言葉に生きる

適用を考えます。イエスは「私の語る言葉は、神の言葉だから、それを信じて欲しい」と叫ばれました。私達は今、聖書を通してイエス様に聞き、イエス様を通して、神の言葉を、神の戒めを聞くのです。本当に聖書は神の言葉でしょうか。カナダの神学校で学んでいる時、隣の州から来ている学生と話す機会がありました。「卒業後はどうするのですか」と聞いたら、「私の目的は、聖書の翻訳の仕事に携わることだから、まだ聖書がない地域に入って行って、聖書をその人達の言葉に翻訳したい」と答えてくれました。「大変な仕事だと思うけど、どうして聖書翻訳の仕事をしよと思ったのですか」と聞いたら、彼は「分からない、でもそういう思いが与えられた」と言いました。電気もない未開の地に入って行って、長い年月をかけて、その人達の言葉に聖書を翻訳するのです。人間的に見れば、報いられることの少ない大変な仕事です。しかし、それに喜んで一生をかけようとする人が起こされ続けているのです。なぜでしょうか。それは、神様が、聖書を、永遠の命に導く神の言葉を、全ての人が、自分達の言葉で読むことが出来るように働いておられるからです。聖書は神の言葉なのです。

そうであれば、聖書に向き合う私達の態度が重要です。「ヨハネ福音書」は、13章から次のまともに入りて行きます。私達を永遠の命に引き込む神の戒めが語られて行きます。それらの言葉にどう向き合っていくか、私達の信仰生活を左右するととても大切なことです。

先程、イエス様を信じる者は、光の中を生きて行けると申し上げました。しかし、現実として、私達は、イエス様を信じていながら「光の中にいる」と言い切れないものを持っているのではないのでしょうか。光の中にいる時もあるでしょう。しかし依然として闇にも捉えられている。そういう現実があるのではないのでしょうか。闇に足を踏み込んだまま生きる時、私達には、眩きが生まれます、文句ばかり言うようになるのです。それによって、希望が覆われてしまうのです。私は、自分が問われます。先日、色々なことが心にやって来て、眩きながら車を運転していました。眩いている時は、希望が見えません。その時—聖書に「すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです」(1 テサロニケ 5:18)とありますが—「感謝しなさい」という声が心に響きました。私はこれまでの歩みを振り返りました。「神は、こんな者を、泥沼のようなところから引き揚げ、恵みを添えて導いて来て下さったな」と思い出しました。そうしたら感謝が出来ました。その時、心がフッと軽くなったのです。神の御言葉の中に飛び込んでしまうところに、恵みを経験する秘訣がきつとあるのです。聖書の言葉を、私を生かす命の言葉、光に導く言葉として、真剣に聞き、御言葉に生きて行くことが大切なのです。そして「父の命令が永遠のいのちである」(50)、神の戒めに生きることは、今ここで、私達を永遠の命に生かすことさえるのです。

水野源三という方のことを思います。水野さんは、小学校4年生の時に赤痢で脳性麻痺になり、

手足が動かなくなり、言葉もしゃべれなくなりました。自由に動かすことが出来るのは瞬きだけです。「死にたい」と思って過ごしていた彼が、14歳の時に、1人の老牧師が置いて行った聖書を食べるように読んで、イエス様を信じたのです。聖書を通して神の愛を知った時、「死にたい」という気持ちが消えて、「神に愛されている」ことを喜ぶようになったのです。それから、瞬きで、お母さんに1文字1文字を伝えて詩を書くようになりました。「悲しみよ、悲しみよ、本当にありがとう。お前が来なかったら、つよくなかったら、私は今どうなったか。悲しみよ、悲しみよ、お前が私を、この世にはない大きな喜びが、かわらない平安がある、主イエスのみもとにつれて来てくれたのだ」。現実には、私等の想像を絶する大変なお暮しだったと思います。しかし—{「すべての事について、感謝しなさい」(1テサロニケ 5:18)という神の戒めをご紹介しましたが—その辛さ、悲しみまで感謝しようとしておられる。その中で水野さんは、生を支えられるだけではない、既に永遠を生きておられたのを感じます。こんな詩もあります。「父なる神様に、すべてをよきように、なしてくださるから、すべてをゆだねよう」(水野源三)。4冊目の詩集のタイトルは「御国をめざして」です。水野さんは永遠を生きられたのではないのでしょうか。

「父の命令が永遠のいのちである」(50)。聖書の言葉は、私達を永遠の命に導く力を持っているのです。イエス様は真剣です。私達も、聖書の語る神の戒め、イエス様の教えを真剣に聞いて、永遠の命の世界に足を踏み込んで、光の中を生きて行きたいと願います。そのようにして生きた軌跡は、死の向こうの世界においても大きな意味を持つのではないのでしょうか。